

長久手キャンパス新1号棟 2023年5月完成

50年の節目を前に完成した新1号棟。 大学と共に新たな歴史を重ねゆく。

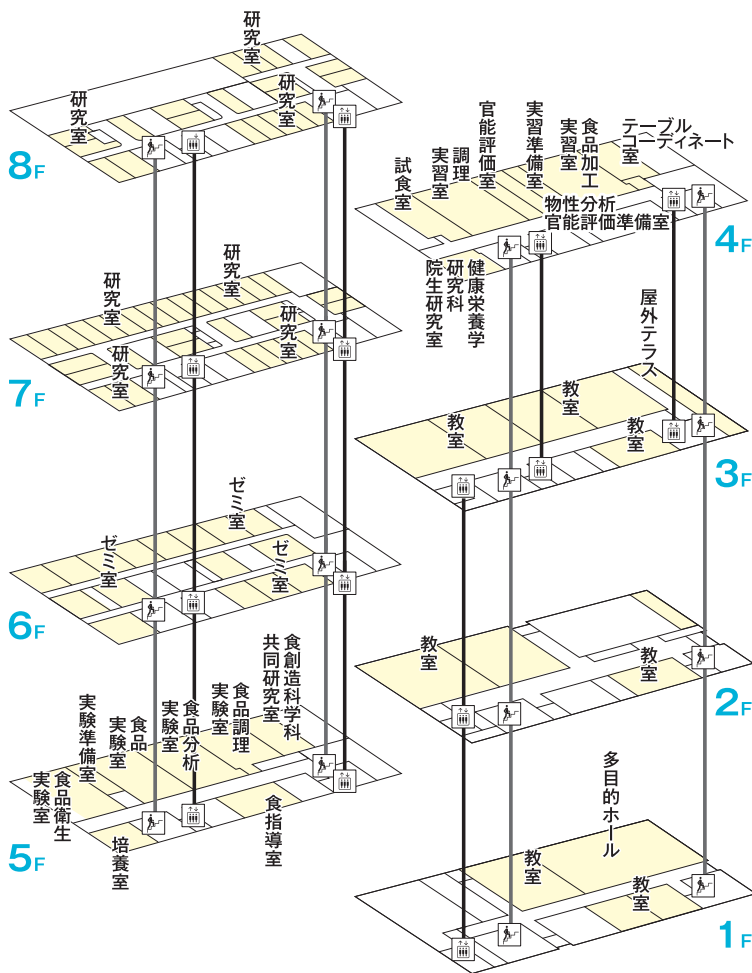
愛知淑徳学園が創立70周年を迎えた1975年、愛知淑徳大学が開学しました。当時の長久手キャンパス周辺は、山林や原野が広がる未開発の地。その緑深い校地に初めて建てられたのが1号棟であり、1974年に竣工しました。真新しい白亜の校舎は、そこに集う学生や教職員の希望を映し、輝きを放っていたことでしょう。それから約50年、文学部のみ小さな大学だった本学は時代と共に教育・研究環境を充実させ、現在は9学部14学科、大学院5研究科、留学生別科を擁する総合大学へと発展。その歩みを見守り、多くの学生に親しまれ続けた1号棟は、2023年5月、開学50年の節目を前に大きく生まれ変わりました。



愛知淑徳学園が創立70周年を迎えた1975年、愛知淑徳大学が開学しました。当時の長久手キャンパス周辺は、山林や原野が広がる未開発の地。その緑深い校地に初めて建てられたのが1号棟であり、1974年に竣工しました。真新しい白亜の校舎は、そこに集う学生や教職員の希望を映し、輝きを放っていたことでしょう。それから約50年、文学部のみ小さな大学だった本学は時代と共に教育・研究環境を充実させ、現在は9学部14学科、大学院5研究科、留学生別科を擁する総合大学へと発展。その歩みを見守り、多くの学生に親しまれ続けた1号棟は、2023年5月、開学50年の節目を前に大きく生まれ変わりました。

愛知淑徳学園が創立70周年を迎えた1975年、愛知淑徳大学が開学しました。当時の長久手キャンパス周辺は、山林や原野が広がる未開発の地。その緑深い校地に初めて建てられたのが1号棟であり、1974年に竣工しました。真新しい白亜の校舎は、そこに集う学生や教職員の希望を映し、輝きを放っていたことでしょう。それから約50年、文学部のみ小さな大学だった本学は時代と共に教育・研究環境を充実させ、現在は9学部14学科、大学院5研究科、留学生別科を擁する総合大学へと発展。その歩みを見守り、多くの学生に親しまれ続けた1号棟は、2023年5月、開学50年の節目を前に大きく生まれ変わりました。

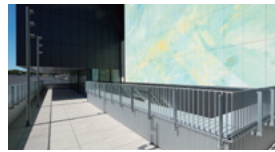
新1号棟フロアマップ



ゼミ室(6F)



屋外テラス(3F)



教室(1F・2F・3F)



多目的ホール(1F)



屋外エスカレーター



研究室(7F・8F)

食創制科学科フロア(4F・5F)

2025年、愛知淑徳学園は創立120周年、愛知淑徳大学は創設50周年を迎えます。その周年記念事業の一環として、長久手キャンパスの整備が進められ、今年5月には1号棟が生まれ変わりました。

竣工祭

2023年5月16日

本学の新たな出発を 祝い式典を挙げる

5月16日、新1号棟の竣工祭が1階の多目的ホールにて開催されました。小林素文理事長や島田修三学長をはじめとする本学教職員と、設計監理や施工を担当した企業の方々が参列しました。会場は厳粛な雰囲気にも包まれ、神事が滞りなく執り行われました。閉式後、小林理事長は「新1号棟は本学の新たな出発を折念した新しい建物です」と本学の歩みに思いを馳せて一言を述べられ、設計・施工者へ感謝状を贈呈しました。



内覧会

竣工祭に引き続き内覧会が行われ、式典に参列した教職員の多くが参加。学生たちが学ぶ姿をイメージしながら各フロアを見学していました。8階からは近隣の猪高緑地や街並みが一望でき、「見晴らしがよく、素晴らしい建物ですね」といった感嘆の声が上がりました。



愛知淑徳学園創立120周年、 愛知淑徳大学創設50周年を記念して、 陶板画2作品を新1号棟に設置。

学園・大学の周年記念事業として、新1号棟の外壁と多目的ホールに陶板画が設置されました。愛知淑徳学園創立120周年記念として外壁に設置された陶板画「蒼穹の風」は、後援会や同窓会などのご協力により制作されました。大きさは外壁の日本画陶板として日本最大級であり、長久手キャンパスの新たなシンボルにふさわしい作品です。また、陶板画「君に読む未来」は、愛知淑徳大学創設50周年記念として初代学長・小林素三郎先生の寄贈特定資産により制作されました。学生の目に留まりやすいよう、新1号棟のメイン動線となる多目的ホールに設置されました。

この陶板画2作品を制作したのは、徳島県鳴門市にある大塚国際美術館の陶板複製画制作も担う大塚オーミ陶業株式会社です。独自の職人技で仕上がりの色彩や質感、光の反射など細部に至るまで調整するとともに、原画の作者である日本画家の久世直幸氏と芝康弘氏も自ら筆を入れ、新たなオリジナル作品として完成させました。



「蒼穹の風」

作・久世直幸氏
(日本画家)

力強く爽やかな色彩が印象的で、風が渡る雄大な風景を感じさせる作品です。無限の空に夢と志を高く掲げてほしいという学生への願いが込められています。高さ12.9メートル、幅10メートルあり、外壁としては日本最大級の日本画陶板です。

「君に読む未来」

作・芝康弘氏
(日本画家)

学生に幼い頃の純粋な好奇心に思いを馳せてほしいとの願いを込め、柔らかな筆致で描かれた日本画陶板です。絵本の読み聞かせに夢中になる子どもたちが生き生きと表現され、木陰の優しい陽射しやあたたかな空気感も伝わってきます。



陶板画2作品を学内外に 向けてお披露目

陶板画2作品の除幕式典が5月30日に挙行されました。参列したのは、日本画家の久世直幸氏と芝康弘氏、大塚オーミ陶業株式会社・大塚栄嗣社長など陶板画制作にご協力くださった方々、後援会・松本秀樹前会長、同窓会・河野豊子会長、小林素文理事長や島田修三学長をはじめとする教職員、学生などの大学関係者でした。さらに、地元の新聞社や美術関連の雑誌社などの取材も入り、注目度の高さがうかがえました。

式典は1階多目的ホールと3階屋外テラスで行われ、両作品それぞれが除幕されると大きな拍手がわき起こりました。久世氏、芝氏、大塚社長による制作者スピーチでは、作品に込めた思いや制作秘話が語られ、久世氏は「若く瑞々しい皆さんがこの陶板画と共に大学でかけがえのない時間を過ごしていただけたら、それに勝るものはありません」と学生へのメッセージもお寄せくださいました。

陶板画は耐久性に優れ、半永久的に美しさが色あせないといわれています。新1号棟の陶板画も、末永く大学と共に月日を重ね、学生一人ひとりのキャンパスライフに彩りを添えていきます。

2023年5月30日

陶板画除幕式典

